奨励賞

表面上の差別化社会

「障害者」というと、どのような人を思い浮かべるだろうか。人とうまくコミュニケーションがとれない人、それとも手や足がない人、勉強がどんなに頑張ってもできない人―。思い浮かべるとたくさんあると思う。そして、身の回りにも障害のある方がいる、見たことがある、という人は多いのではないだろうか。厚生労働省のホームページを見てみると、「障害者とは身体障害、知的障害又は精神障害があるため、継続的に日常生活又は社会生活に相当な制限を受ける者をいう」と書いてある。一括に障害者と言っても、様々な区分があるらしい。身体障害者、知的障害者、また知的障害者の中で十八歳未満の人を障害児と指すのだそうだ。さらにそこからも、いくつかの区分に分かれている。障害を区分することで支えられて、より良い日常生活を送れる人もいると思う。今では、障害のためで生活が苦しい人には障害者手帳や障害者雇用といったものもある。それはそれで素晴らしい制度だと私は思うし、障害のある方々がより良い生活を送れるようにすることは皆望んでいることだと思う。しかし、この障害者区分について、私の考えが一気に変わるような出来事があった。

一学期の最後のほうの国語の授業のことだった。世間一般に言われる、「障害者」の言い回しについて、様々な立場の人が意見を述べている紙を配られ、それに対して自分の意見を述べるものだった。私が見ている中で、印象に残った意見があったものは、「『障害者』という言い方はあまり良くない。では、『要支援者』と呼ぶのはどうだろうか。（中学校教師５８）」というものだった。その時、素敵な考え方だ、と思ってしまった私がいた。「要支援者」。障害の「害」の字が入っていなくて、響きも素敵な言い回しだと思った。差別化、という面で見ても「障害者」よりも差別されている感じがしない。しかし、この次の意見を読んだ時、私はこの意見につっかかりを感じた。「私は事実、障害者であるが、障害者であっても、生活に不便を感じることもなく生きている。人を助けたりすることもある。それなのに、普通の人との壁を作るようにわざわざ『要支援者』や『障害者』などと言い回しを作ること自体がおかしいのではないだろうか」本当にそうだと思った。今までの考えが全部ひっくり返った気がした。当人である障害者は、あの中学校教師ではない。当人に聞かず、自分の意見ばかりを述べている。その時、私の脳裏に「これって、自己満足なのでは？」という考えがよぎった。きつい言い方にはなるが、こうして社会に見合うような言い回しを考えて、自己満足している人は、前の私だけではないと思う。最初の意見を聞けば、誰だって共感してしまうのが事実である。最近では、「障害者をいたわってあげましょう」とか、「偏見をもたないようにしましょう」などといった当の障害者本人の意見を

聞かずに自分たちの勝手な解釈でこういった意見を述べる人が多いと思う。そして、自分がその意見に賛成していたことや、こういった呼び方であるべきだ、と思っていたことがとても恥ずかしく思えてきた。確かに、世の中には様々な人がいると思う。私も、苦手なことがたくさんあれば、得意なこともたくさんある。よく、友達や親から「たまにどこか抜けているところがあって、おっちょこちょいだよね。でも、そこがあなたの良いところだと思う。人間味があって、とてもおもしろい」と言われる。得意なこと、苦手なこと、それは皆もっていて、たとえ障害があろうがなかろうが、自分の長所を大切にすればいいのだと思う。だから、障害の有無で「障害者」という単語の言い回しを考えていること自体が差別であって、皆同じ人間なのだから障害の壁を分け隔てなく生きていくことが一番理解ある接し方なのではないだろうか。これから生きていく中で、障害のある方に出会うことはたくさんあると思う。そんな中、「あの人には障害があるからこの仕事は任せられない」などと言った考え方は絶対にしたくないし、そもそも同じように生きているのだから対等に接していきたいと思う。これからの未来をつくるために、私たちができることは、障害の有無関係なく対等に接していくことだと、私は考える。